様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2015
課題番号：２６６３０２８３

研究課題名（和文）建築と祭儀から見た神社の成立に関する研究

研究課題名（英文）Study on establishment of the Shinto shrine judging from a building and a festival

研究代表者
黒田　龍二（KURODA, Ryuji）

神戸大学・工学（系）研究科（研究院）・教授

研究者番号：４０１８３８００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：奈良時代に国家的な要請のもとで整備された賀茂神社と春日大社の社殿の意味を祭儀と建築の側面から明らかにした。山城の国の賀茂社は、奈良時代に国家的な大社として二つの神社となった。上賀茂神社は古い祭儀を伝え、古い土地で建物を増やしていった。下鴨神社は、平安時代の祭に対応して広々とした土地に左右対称の建物群を形成した。春日大社は奈良時代に形成された神社であるが、建物ができるより前に、祭を行っていた。その後、立派な建物ができたが、古い祭の要素を残している。上賀茂神社と春日大社の本来の祭祀は、類似している。上賀茂神社の社殿のあり方は、伊勢神宮と似た面があるので、王権の祭祀の影響を受けたものと推定される。

研究成果の概要（英文）：I clarified the meaning of the main shrine of Kamo Shinto shrine and Kasuga Taisha Shrine maintained under the national request in the Nara era from a festival and the side of the building. Kamo Shrine of the country of Yamashiro became two Shinto shrines as a national big shrine in the Nara era. Kamigamo Shrine conveyed an old festival and increased buildings in old land. Shimogamo Shrine formed symmetric building group in response to a festival of the Heian era on the extensive land. Kasuga Taisha Shrine was a Shinto shrine formed in the Nara era, but performed a festival before a building was done. An excellent building was done, but leaves the element of the old festival afterwards. The original religious service of Kasuga Taisha Shrine was similar to Kamigamo Shrine. Because the way of the main shrine of Kamigamo Shrine has an aspect like Ise Grand Shrine, it is estimated that I was affected by the religious service of the sovereignty.

研究分野：日本建築史

キーワード：神社の成立　建築　祭祀　上賀茂神社　下鴨神社　春日大社　造替

１．研究開始当初の背景

２００９年に奈良県桜井市で発見された纒向遺跡は日本歴史上の極めて大きな発見として、歴史学、考古学から注目された。その評価は、基本的には初期ヤマト王権の王宮の遺構であるという理解のうえでなされたものである。

しかしながら、纒向遺跡の３世紀という年代とそれが建築遺構であるという点からすれば、当然、建築史学上の問題となり、また神話の時代に属することから、日本国家の起源、神社、特に伊勢神宮の起源に関する問題を含んでいる。

そのような観点から、筆者は著書『纒向から伊勢・出雲へ』（学生社、２０１２年）を発表した。そこでは日本国家、ヤマト王権、その王宮、伊勢神宮、出雲大社のそれぞれの起源について、日本書記、古事記などの文献史料と神社建築の理解・解釈を駆使して、纒向遺跡の遺構の歴史上、建築史上、神社史上の意義付けを行い、新しい評価を行った。この仕事は、大きい社会的反響を呼び、NHKスペシャル「二つの遷宮」(2014) をはじめ、マスコミにも大きく取り上げられた。

２０１２年段階では、纒向遺跡を初期ヤマト王権の王宮とみて、伊勢神宮、出雲大社の社殿形態と起源を論じたにとどまるが、ここでは、伊勢。出雲から始まるその後の神社史、神社建築史の再構築を構想した。

本研究はそのような大きい構想の一環として行ったものである。

手始めとして注目したのは、伊勢神宮の神明造、出雲大社の大社造に次ぐ次代の神社本殿形式である山城国（京都府）賀茂社の流造、大和国（奈良県）春日大社の春日造の社殿形式の意義である。

２．研究の目的

神社建築とその意味、使用法について、纒向遺跡、伊勢神宮、出雲大社に関する研究で筆者の得た結論は次のようなものである。

（１）伊勢神宮の祭祀は、三節祭などの重要な祭祀は庭上祭祀である。日毎朝夕大御饌祭として行われる日常祭祀は御饌殿における殿内祭祀である。

御饌殿における殿内祭祀は、王宮における同床共殿の祭祀の御饌部分を受け継ぐものである。

庭上祭祀は天照大神に対する祭祀として、まだ正殿が建設される以前の内宮の付近で行われたものであろう。

（２）出雲大社の祭祀は基本的に本殿内で行う殿内祭祀であり、それは初期ヤマト王権の王宮で行われていた大王と神との同床共殿の祭祀と同じ考えで行われたものである。

初期ヤマト王権下で形成された大王および王権における王権祭祀と神社祭祀が以上のようなものであったとして、その後形成された国家的な神社祭祀と神社建築の形態や意義はどのようなものあったのかが、この研究の課題である。

３．研究の方法

伊勢神宮、出雲大社につぐ古い形態の神社としては、まず住吉大社がある。住吉大社の本殿つまり住吉造本殿については、福山敏男氏によって、大嘗祭悠紀殿、主基殿との類似が指摘されている。しかし、住吉大社に関しては、本殿形態の解釈を可能にするような古い祭儀がいまのところ明らかでない。

本研究では、その次の古式な神社の形態と祭祀をとどめる上賀茂神社、下鴨神社神社、春日大社の社殿と祭祀に関して、その意味を中心に研究を行う。

（１）賀茂社の社殿と祭祀

ここでいう賀茂社は京都の上賀茂神社、下鴨神社神社である。両社の本殿形態は流造である。現在の社殿は文久３年（1863）の本殿をはじめとする江戸時代の社殿群である。しかし、本殿形態については、鎌倉時代の形態が谷重雄の研究によって明らかになっており、それは現状と大きくは変わらないものである。このような本殿形態は平安時代には成立していたものと考えられている。

祭儀としては平安時代以来の伝統を継ぐ葵祭りがある。葵祭りは戦国時代に一度途絶えたが、記録などをもとにして、江戸時代に復興されている。また、より原始的な神事として、葵祭りの前日にミアレ神事が行われている。この神事は現在も秘儀であり、拝観することができないし、年代観も明らかではない。しかし、神社の神職をはじめとする研究によって、その原始的な形態が明らかになっており、葵祭よりも古い祭祀を伝えるものとされている。

（２）春日大社の社殿と祭祀

春日大社は奈良市に所在し、奈良時代以後の朝廷を中心とする政治の中心的な役割を果たしてきた氏族、藤原氏の氏神である。現在の社殿は文久３年（1863）の本殿をはじめとして、鎌倉時代以降の社殿群で形成されている。本殿の形態に関しては福山敏男、黒田舜義の研究がある。少なくとも平安時代には現在の形態に近い形であったと考えられている。

祭儀としては、平安時代の様態を伝える春日祭が現在も行われている。また、平安時代後期に始まった祭だが、春日若宮社の春日若宮おん祭も古式な祭礼として著名である。

（３）本研究では、以上のような現状および研究状況にある上賀茂神社、下鴨神社神社、春日大社について次のような研究を行った。

賀茂社に関しては、上下二社について、建築物の配置を比較し、分析した。また、文献史料などによって、葵祭、ミアレ神事を場所や構築物との関連で分析し、祭祀の性格を考察した。

春日大社に関しては、本年はちょうど式年遷宮の前年に当たっていて、本殿が修理工事中であるため、通常は拝見できない本殿の屋

根をはじめとして、間近に調査することができた。そして、文献史料などから春日祭での本殿の飾りつけ、祭祀のあり方を検証し、祭祀の性格を考察した。

４．研究成果

（１）賀茂社の社殿配置と祭祀

上賀茂神社と下鴨神社では主要な祭として共通の祭すなわち葵祭が行われる。しかし、社殿の配置や本殿のあり方は大きく相違している。その理由を考察することにより、社殿の意味、その形成された時期などに関する知見が得られる。

① 神社の起源

上賀茂神社と下鴨神社は、もとは山城の地域の豪族が祀るひとつの賀茂神社であった。賀茂神社は少なくとも七世紀には存在し、八世紀中頃に上下に分立したとされる。その後、都が京都の地に遷される前後から賀茂神社は朝廷から重んじられた。弘仁十年（819）には賀茂祭が伊勢神宮の神嘗祭と同じ中祀の格付けとなり、神宮にしかなかった斎王もこの頃に賀茂神社に置かれた。神宮に次ぐ厚遇が賀茂神社の様々な特色を生み出したと考えられる。

② 現存の社殿

上下賀茂神社は、双方とも奥に同形同大の三間社流造、檜皮葺の建物が二棟並び建っている。年代も同じ文久三年（1863）の建物であるが、下鴨神社は 2 棟とも本殿であり、上賀茂神社では本殿と権殿である。流造は本殿形式の中で最も一般的なものであるが、装飾を廃した質実な形態の賀茂神社の本殿はその典型例である。両社のその他の社殿群は、おおむね下鴨神社が寛永六年（1629）、上賀茂神社は同五年のものである。両社は、もとは一体の神社だったからよく似た面があるが、境内の構成はかなり異なるものである。

③ 下鴨神社の社殿配置

下鴨神社は森に囲まれた平坦地にある。建物群の配置は、主要な建物はだいたい左右対称に配され、中軸線がある。奥の並び建つ二棟の本殿周辺も左右対称の構成である。

④ 上賀茂神社の社殿配置

上賀茂神社の中心部は、東の御物忌川と西の御手洗川が合流してできた三角形の斜面地に形成されていて、北が高い境内には多くの社殿が建て込んでいる。奥に 2 棟の同形同大の三間社流造が並び建つ構成は下鴨神社と同じであるが、東は本殿で神を祀り、西は権殿で仮の建物とされ、神を祀らない。本殿の前には祝詞屋があって、中心部で左右対称が崩れている。境内全体としても左右の対称性はなく、中軸線もない。

⑤ 葵祭のおける社殿の使用法

一方、祭儀においては両社の間に大きな違いはなく、葵祭では同じ行事を下鴨、上賀茂の順で行う。しかし、その中でも重要な勅使の御祭文奏上が、下鴨では舞殿、上賀茂では橋殿で行われる。下鴨の舞殿は楼門の内側にあるのに対して、上賀茂の橋殿は楼門外でしかも川の上に作られている。同じ祭儀に対して、両社は異なる位置と形態で対応しているのである。この差異はどのようにして生じ、何を物語るのだろうか。

⑥ 上賀茂神社と下鴨神社の本殿の配置と伊勢神宮

平安時代以後、両社は朝廷の厚遇を受けて維持された。その過程で上賀茂神社と下鴨神社ができたが、そのような神社の構成は、神宮の内宮、外宮の構成に類似する。また、下鴨神社の同形同大の本殿が並び建つ形、また上賀茂神社で本殿と権殿が並び立つ形は伊勢神宮の式年遷宮で新正殿が完成したとき二つの正殿が並び立つのに類似する。

⑦ 伊勢神宮の社殿配置と式年遷宮

神宮では、20 年に一度すべての社殿を造替する。そのために、東殿地と西殿地があり、一方の殿地は常の状態では空き地である。式年遷宮では、その空き地の方に新しい社殿群一式を建設し、旧正殿から新正殿に御霊代を遷す。その後心御柱だけを残して、旧正殿は解体し、殿地は更地となる。

この研究で注目するのは、御霊代を遷す遷御の儀が短時間で終了することである。通常の神社でも社殿が破損すると修理を行う必要がある。神が本殿に奉安されている状態では大修理はできないので、仮殿を作ってそこに御霊代を遷し、神が不在の状態で本殿の修理工事を行い、終了したらもとに戻すという方法が一般的である。この場合、本殿で修理工事が行われている期間は、神は仮殿に奉安される。修理工事が続く期間、何ヶ月も何年も仮殿の状態が続く場合がある。神宮の遷宮の方法だとそれは起こらない。つまり、神宮には「仮」の状態がないのである。

⑧ 上賀茂神社の造替遷宮の特殊な方法

上賀茂神社では、もともとは式年遷宮の制度はなかった。しかし、造替は幾度も行われている。その方法が本殿と権殿が並立することと深く関係している。

奈良時代から平安時代はじめにかけて、上下賀茂社は都の鎮守として位置付けられ、神宮に倣って社殿を整備したと考えられる。上賀茂神社には式年の制はなかったが、その造替方式は神宮との比較の上で意義深いものである。上賀茂神社は東が本殿、西が権殿である。嘉元三年（一三〇五）の『御遷宮日記』によれば、造替はまず権殿を建替えて、本殿のすぐ前に新しい本殿を作る。次ぎに御霊代を権殿に移して本殿を取り壊す。そして本殿の位置に新本殿を引屋して、御霊代を新本殿に移す。この権殿に御霊代を写すこと以後を二日のうちにおこなう。権殿は仮殿とはいえ、本殿とまったく同形同大で、御神宝も揃っている。上賀茂神社がこのような不思議な形態と、造替方法をとる理由は、神宮と同じく仮の状態を極限的に短くするためであると考えられる。

上賀茂神社の本殿と権殿の関係はおそら

く神宮と同じ理念にももとづくものであり、極めて特殊な事例である。
　下鴨神社における造替遷宮の方法は先述した通常の方法である。近くに仮殿を建てて、そこに御霊代を遷し、本殿の修復ないし建て替えが完了後に再びもとの建物に御霊代をもどす。造替する社殿の近くに仮殿を立てる場が確保されている点が、神宮の殿地のあり方に近いともいえる。この点は、下鴨神社では本殿二棟が並び立つ形は同じだが両方の建物に神を祀っているので、上賀茂神社のような方法は考えられていない。また本殿が並立する形は、他の神社、たとえば次に検討する春日大社でも四殿並立しており、それほど特殊なものではない。

⑨　上賀茂神社と下鴨神社の社殿配置の比較
　下鴨神社では広々とした境内に、社殿を左右対称に配置している。この社殿配置は、平安時代に勅使が来る葵祭がはじまり、また摂関家などの賀茂詣の隆盛に対応した形態といえよう。
　上賀茂神社では余裕のない敷地に本殿、権殿、中門をはじめ楼門、左右廊を建て、楼門外には葵祭に対応する一連の建物が自由に配置されている。これは奈良時代以前からの古い伝統をもつ鎮座地に建物を増やしていったと推定される。

⑩　上賀茂神社の形態の意味
　下鴨神社の社殿やその配置は、上記のように平安時代の賀茂社の隆盛に伴って形成されたものと考えられる。
　それに対して、上賀茂神社の社殿群が整然としていないのは、その敷地が、賀茂祭が官祭となる以前からのものであり、祭りが発展するにつれて社殿群を増やしたものであることを示している。その古さを証明するのは上賀茂神社で葵祭の直前に行われるミアレ神事である。この神事は、神社から離れた場所に神を迎える神事であり、ここから本殿に神を移す。このことは、神は祭に際して神社本殿に迎えられるという古制を示している。以上のことから、その年代がはっきりしないミアレ神事と本殿の関係は、奈良時代以前のものであることが推定できる。

（２）春日大社の社殿と祭祀
　同一であっても不思議はない二つの賀茂社の本殿の意味、社殿配置が異なる理由は、下鴨神社が新しく創立され、平安時代の祭儀に対応したものである点に求められる。一方の上賀茂神社は、奈良時代以前の祭儀と社地を守っているので、下鴨神社との相違が生じた。上賀茂神社のあり方は、天武・持統朝に形成された神宮の式年遷宮の影響を受けた部分があると推定した。
　また、上賀茂神社のミアレ神事は祭に際して、神を神社に迎えるという、やはり古くからの祭儀の形態をとどめるものと考えられるが、これはこの時代の上賀茂神社に限ることがどうかという問題がある。この点について、奈良時代から平安時代にかけて社殿を形成し、藤原氏の氏神という、天皇家つまり大王家とは異なる豪族の神社のあり方を検討した。
　春日大社の最も重要な祭儀である春日祭では、平素は宝庫に格納されている矛や盾などの威儀具が、祭礼の時に運び出されて本殿の周辺に飾られる。祭礼時に供物などで社殿が飾られるのは通常のことであるから、春日大社の祭礼時の飾りの意味もあまり注目されてこなかった。しかし、このことの意味は次のような春日大社の創始にかかる記録の矛盾にも現れていると考えられる。
　春日大社では神社の伝承として神護景雲二年（768）を造営鎮座の年としている。しかし、天平神護元年（765）の記録（新抄格勅符抄）に「春日神」、天平勝宝八歳（756）の東大寺図に「神地」の書き込みがあることから、社伝より前に春日社はあったものと考えられる。神社の伝承は起源を古く伝えるのが普通であって、春日大社のような事例は稀である。このことは、春日大社の地では春日の神に対する祭の場は早く設けられており、恒常的な社殿ができたのが神護景雲二年（768）と考えることができる。春日の神はもともと祭に際して来臨する神とであり、社殿ができて後も祭のときには神を迎えるという意識が残ったと考えられる。
　この点で、上賀茂神社のありかたと春日大社のあり方は類似性のあるものと理解することができる。それは、奈良時代から平安時代にかけて、国家的に整備された神社信仰のあり方と関係している。それによって形成された建築のあり方は日本独特のものであり、当時の王権のあり方とも問題を共有するものと考えられる。王権のあり方との関係は今後の課題としたい。

５．主な発表論文等
〔学会発表〕（計２件）
① 黒田龍二、神社本殿と式年遷宮の意味、上賀茂神社崇敬会大会講演（招待講演）、2015.11.18、上賀茂神社（京都府）
② 黒田龍二、伊勢遺跡の大型建物、伊勢遺跡シンポジウム（招待講演）、2015.9.19、守山市民ホール（滋賀県）
〔図書〕（計 1 件）
① 黒田龍二、養老猛、山折哲雄ほか 11 名、主婦の友社、聖地の入－京都下鴨神社式年遷宮の祈り－、2016、4（108－111）（「下鴨神社と上賀茂神社の社殿の特色」を分担執筆）、

６．研究組織
(1)研究代表者
黒田　龍二（KURODA , Ryuji）
神戸大学・大学院工学研究科・教授
研究者番号：４０１８３８００